

# 福澤 公伯（ふくざわ・こうはく）

## 1、プロフィール

夢見がちな少年の世界を歌い続けた詩人。同人誌「狐裘」や第二次「飾画」の編集にあたった。本づくりが好きで、編集活字や組み方、装丁等にも才能を発揮した。

<生没>

1951(昭和 26)年3月 12 日～1999(平成 11)年3月 24 日

<代表作>

『青磁色の刻限で』『妖精の輪の中から』『白磁・白亜・風の夢』『幻の鰐伝説』  
『夏の終りの薔薇』『恢後期』

<青森との関わり>

弘前市土手町 27 の食料品店を営む父福澤平吉(へいきち)と母壽代(ひさよ)・旧姓清野)の長男として誕生。弘前市専求院の墓地に眠る。

## 2、作家解説

弘前大学附属小学校、同附属中学校、青森県立弘前南高等学校卒業。よく友と遊びギターを弾く快活な少年で文学面の活動はないが、母方の叔父は歌人清野利保で後年の影響がある。家業を継ぐため専修大学商学部に入學したが中退、早稲田大学文学部の聴講生となった。ロックバンドで演奏し外国の曲に詞を作り、絵画に親しみ吉本隆明に傾倒し、この時代の軌跡が、帰郷後の詩人福澤公伯を形成した。

第1詩集『青磁色の刻限で』(昭和 50 年発行)の著者として帰郷して公伯は、幼なじみの三上勉が予想した音楽家でなく詩人になっていた。老舗(しにせ)である食料品店の生家に「狐裘舎」(こきゅうしゃ)を置き、三上勉らと同人誌「狐裘」(狐のわきの白毛皮で作ったかわごろも、貴重品の意)を発刊したのは、昭和 53 年(1978)年6月である。公伯 29 歳、「狐裘」同人の工藤美栄子と結婚し、のち長男

玄伯(はじめ)を得た。昭和 56(1981)年「狐裘」は6号で休刊した。同 59(1984)年、「狐裘」と「飾画」(かざりえ、内海康也主宰、昭和 51 刊～同 53 年休刊)が合併し第2次「飾画」として公伯が編集にあたった。2人の共著としてソネット詩集『花燃え』が出る。同 63 年第 25 号をもって、公伯は見解の相違で「飾画」を離れた。

店の奥のどっしりした机で作品を書き思索し、中原中也や立原道造に親しみ柳田國男・夏目漱石を愛読した。1993(平成5)年6月から、陸奥新報社の「文芸時評」を 12 回担当し、鋭くえぐった詩人らしい見方の独特な時評で難解な一面もあった。

外国の現代文学や音楽を愛し、大いに酒を好んで詩を論じた。自作の詩を何度も編集し直して完本化を図った。経済性を度外視した繊細さは、公伯の特徴だった。ペンネームは清野道夫の他にも多い。賞には無縁だったが、その生きかたを知る人は、公伯の生活の前を常に詩が歩いていたと異口同音に言う。

公伯は、アーニャへの執着した愛、夢見がちな少年の世界を歌い続けた。詩作のことばざわりは優しく長文である。越えるべきことばの深淵を主張せず、現代詩のジャンルを重大視しなかった。「火祭り」「わが鰐伝説へ」「未来のイブ」に詩的人生が存し、第五詩集『恢復期』に生活感がにじむが、死期が近づいていた。刊行予定の完本『福澤公伯全詩集』全四冊組は成らなかった。